

研究室紹介

名城大学 農学部 植物病理学研究室

2026年に開学100周年を迎える名城大学は、学生数1万4,000人を超える文理融合型総合大学として、愛知県名古屋市を拠点に10学部・大学院9研究科を設置し、社会のニーズを捉えた教育・研究を展開しています。そのなかで植物病理学研究室は、農学部・同研究科において生命・食料・環境・自然に関する専門的学識と洞察力を備えた人材の育成を目指し、教員体制2名（荒川征夫・藤原和樹）で運営しております。

当研究室はこれまで、先代教授の稲垣公治先生とともに、水稻や畑作で発生する各種菌核病を主な題材とし、圃場における病気の発生に関与する多様な菌類の分類と系統的解析、病原性の評価、圃場内での生存戦略などを調べてきました。さらに近年では、農林水産大臣の許可のもとアジア諸国より採集した分離菌株について遺伝型特性の比較や、土壤微生物叢の多様性維持管理に基づく病害防除法について検討を行ってきました。2022年4月、藤原和樹博士が助教として着任したことを一つのきっかけに、研究内容が発展・多様化するとともに民間企業や公設機関との連携がさらに広がりつつあります。

私立大学の特色の一つではありますが、研究室に在籍する学生数は学年当たり約15名と多く、個性や興味も豊かです。そのなかで学生たちは、自身の価値観をしっかりと築き、日々の研究活動を中心に将来へ向けたキャリア形成に取り組んでいます。学部3年次からの卒業研究テーマとして、以下のような内容があげられます。前述の繰り返しを含みますが、1) 土壤生息微生物の多様性維持管理による発病抑止技術の開発、2) 病原体の診断・同定・検出にかかわる技術開発、3) 栽培環境や気候の変動に伴う新病害発生や被害拡大の制御に関する研究、4) 病原体の遺伝型解析に基づく地理的分布様式の研究などです。卒業後の進路開拓に向け、必要となる技術や知識の修得だけでなく、何よりも学生個々の興味を尊重し、教員との間で綿密な打合せを重ねながら研究テーマを決めています。また幸いなことに近年、種苗や土壤資材の生産にかかわる各企業に所属の社会人が数名、本研究室の研究員として在籍し、学生たちを交えた共同研究を進めております。学生自身が取り組む研究内容やその成果が、社会貢献に直結していることを実感できる非常に良い機会として、このような受け入れ体制を



図-1 名城大学の天白キャンパス内の様相
植物病理学研究室は手前の白い建物内に設置。



図-2 令和6年度の卒業・修了祝賀会における、
本研究室を巣立つ学生たちとの集合写真

設置する名城大学の方針をありがたく思っております。

卒業後の進路として、多くは食品製造や食材流通にかかわる企業に就く傾向があり、特に微生物の取り扱い経験が多いため、発酵醸造や製菓業の分野への就職も目立ちます。植物病理学が直接関連する分野として、近隣の各県庁における農学職へ毎年、農水省植物防疫所への直近3年間連続採用などがあげられ、関連分野に限らず各方面での活躍を嬉しく思っております。

ところで植物病理学分野の数少ない弱みの一つとして、入学直後から「病理学に興味がある」と口にする学生が極端に少ないことがあげられます。多くは園芸・作物・育種や昆虫学分野に興味があるようです。安定した食料供給において植物保護がいかに重要であるかを、担当講義のなかだけで力説するのではなく、研究成果の有用性や社会貢献の高さについて、より広い世代へ向け情報発信する姿勢が必要と思っております。昔のことわざにある「下農は草を育て、中農は稲を育て、上農は土を育て、上々農は人を育てる」をモットーに、教員自身の研究を進めることのみを本意とせず、学生個々の知識・技術・発想そして人間性がしっかりと育っているか、を常に問いながら教育・研究をさらに発展させる所存です。

（准教授 荒川征夫）